



CONTENTS

- 初年次教育科目の導入に向けて
副学長(全学共通科目教育運営委員会
委員長) 齊藤 正
- 2011年度「学生による授業アンケート」(後期)集計結果
- フィールドワークで出会った駒大
OB: 初年次教育に思う
GMS学部・教授 白水 繁彦
- FD研修会の開催のお知らせ

初年次教育科目の導入に向けて

副学長(全学共通科目教育運営委員会委員長)

齊藤 正

1月の全学教授会で、平成26年度からのカリキュラム改革に合わせて「初年次教育科目」が全学的に導入されることが合意された。正式な科目名、シラバスの詳細、担当学部・学科など、実施に向け、なお詰めなければならない事項も残されているが、ソーシャルスキル、オリエンテーション、自校教育、キャリア基礎という、学部・学科を越えた「大学入門」、「大学生入門」的要素を盛り込み、前期2単位、全員履修の全学共通科目として設置されることになった。

大学教育への「初年次教育科目」の導入が云々される直接的契機となったのは、いわゆる「3つのポリシー」の具体化を求めた、平成20年の中教審答申「学士課程教育の構築に向けて」であった。そこには、一方において、グローバル化が進展するなかで、「日本の大学卒業生」の「質保証」を求める産業界の要求があり、他方、大学サイドにおいても、大学のユニバーサル化の進展、入試制度の多様化に伴う、不本意入学、学力不足といった、従来のカリキュラムのままでは授業そのものが成立しえない状況が生まれ始めていることへの危機感があった。

「今更ながら大学入門、大学生入門なんて」という嘆きも聞こえてくるが、「初年次教育科目」設置の一番の眼目は、大学で学ぶことの意義を学生たちに伝えるところにある。「学び」それ自体の喜び、そして「学び」を通じて自らの成長を実感する喜び、それを知らずして入学してくる学生は少なくない。和田昭允東大名誉教授は「知識と知恵」と題した、本年2月2日付『日本経済新聞』夕刊のコラムで、知恵を発揮して知識を纏(まと)めると、それが自分の身になって、もっと知識が欲しくなり、知恵も湧かせたくなる、教育はこうした、「智の発展のらせん階段」を楽しく駆け上がらせることができれば成功だ、という趣旨のことを述べておられる。

確固とした知識として獲得されることもなく、知恵によって活かされることもないまま、膨大な「情報」が日々堆積し続ける現代社会において、「智の発展のらせん階段」を体験しないまま進学してきた学生たちの「変化」に注意を払いながらも、大学教育本来の役割を「今更ながら」問いかけること、「初年次教育科目」の導入は、まさにFD活動の重要な一環であり、われわれ大学教員としての社会的使命と矜持が問われる場でもあると考えられる。そして、それはまた、本学における重要な課題の一つである、1年次生の退学者を一人でも少なくすることに結びつくことも期待されている。

以上、私見を述べてきたが、全学共通科目教育運営委員会委員長としての立場からは、シラバスづくり等を通して全学的な共通理解がさらに深められるよう、今後とも努めていきたい。

2011年度「学生による授業アンケート」(後期) の集計結果について

2011年度「学生による授業アンケート」(後期)を以下のとおり実施した。

実施日	平成23年11月7日(月)～11月12日(土)
対象科目	1,649科目
対象者数	156,178人
実施科目数	1,647科目(99.9%)
有効回答数	72,161枚(46.2%)

【質問項目】

- Q 1. 時間どおりに出席した割合はどのくらいですか。
5: 100～80% 4: 79～60% 3: 59～40% 2: 39～20%
1: 20%未満
- Q 2. 授業に熱心に取り組みましたか。
5: 全くそう思う 4: そう思う 3: ふつう 2: そう思わない
1: 全くそう思わない
- Q 3. この授業の予習・復習にあてた時間は、1週間に何時間くらいでしたか。
5: 5時間以上 4: 約4時間 3: 約3時間 2: 約2時間
1: 1時間未満
- Q 4. どのような理由でこの授業を履修しましたか。(複数回答可)
5: シラバスを読んで興味を持った 4: 資格の取得
3: 周りの人に勧められた 2: 必修科目又は選択必修科目
1: その他
- Q 5. 授業の開始時刻・終了時刻は守られていましたか。
2: はい 1: いいえ
- Q 6. 休講は少なく通常通り、授業は実施されましたか。
2: はい 1: いいえ
- Q 7. この授業の進み方はあなたにとって適切でしたか。
5: 早すぎる 4: やや早い 3: ちょうどよい
2: やや遅い 1: 遅すぎる
- Q 8. 教科書・資料・教材・器具・用具等は効果的に使われていましたか。

- 5: 全くそう思う 4: そう思う 3: どちらともいえない
2: そう思わない 1: 全くそう思わない
- Q9. 担当教員の授業への取り組みには熱意が感じられましたか。
5: 非常に感じた 4: 感じた 3: どちらともいえない
2: あまり感じなかった 1: 全く感じなかった
- Q10. 教え方はわかりやすかったですか。
5: 非常にわかりやすい 4: ややわかりやすい 3: ふつう
2: ややわかりにくい 1: 非常にわかりにくい
- Q11. この科目の授業内容をどのくらい理解できましたか。
5: 非常に理解できた 4: やや理解できた 3: ふつう
2: あまり理解できなかった 1: 全く理解できなかった
- Q12: この授業で受けた知的刺激に対する満足度はどうでしたか。
5: 非常に満足 4: 満足 3: どちらともいえない
2: 不満 1: 非常に不満
- Q13. ～Q15. 担当教員による個別質問
- ◇自由記述
- Q16. この授業の良かった点を具体的に記入してください。
- Q17. この授業の改善してほしい点を具体的に記入してください。
- Q18. 担当教員による個別質問

【無記名式と記名式の併用、学年別平均値】

2010年度より、授業改善に対する学生の誠実、真剣な意見・要望を集約できるようにするため、これまでの無記名式から、学生が記名式か無記名式かを選択できるように変更した。記名の有無の割合は、図1のとおりである。記名の有無別の平均値は表1のとおりである。また、学年別の平均値は、表2のとおりである。

図1 記名の有無の割合

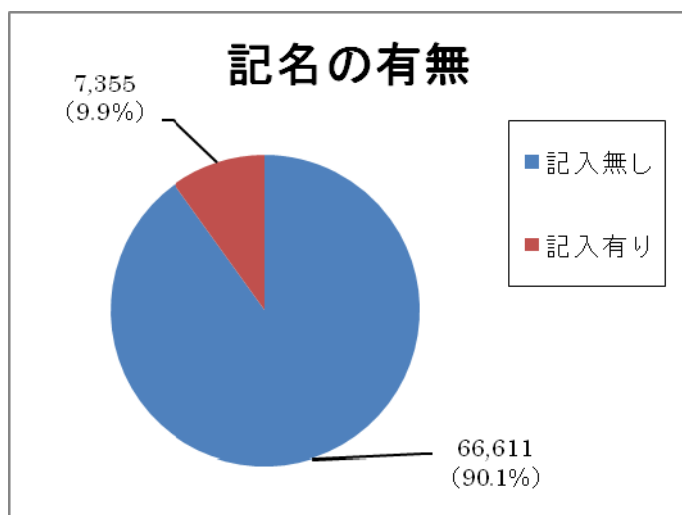


表1 記名の有無別の平均値

	記名無し	記名有り
Q1 平均値	4.6	4.7
Q2 平均値	3.7	4.0
Q3 平均値	1.4	1.5
Q4 平均値	3.1	3.2
Q5「はい」回答率	94.6	95.4
Q5「いいえ」回答率	5.4	4.6
Q6「はい」回答率	97.3	97.0
Q6「いいえ」回答率	2.7	3.0
Q7 平均値	3.2	3.2
Q8 平均値	3.7	3.8
Q9 平均値	3.9	4.1
Q10 平均値	3.6	3.9
Q11 平均値	3.4	3.7
Q12 平均値	3.6	3.9
有効回答数	66,611	7,355

表2 学年別の平均値

	1年	2年	3年	4年	その他
Q1 平均値	4.7	4.7	4.6	4.4	4.7
Q2 平均値	3.8	3.8	3.7	3.8	4.1
Q3 平均値	1.4	1.4	1.4	1.4	1.8
Q4 平均値	2.8	3.2	3.5	3.7	3.7
Q5「はい」回答率	94.5	95.1	94.5	94.8	92.0
Q5「いいえ」回答率	5.5	4.9	5.5	5.2	8.0
Q6「はい」回答率	97.1	97.8	97.1	96.8	94.3
Q6「いいえ」回答率	2.9	2.2	2.9	3.2	5.7
Q7 平均値	3.2	3.2	3.2	3.2	3.1
Q8 平均値	3.6	3.7	3.7	3.8	3.9
Q9 平均値	3.9	3.9	4.0	4.1	4.3
Q10 平均値	3.5	3.6	3.6	3.8	4.0
Q11 平均値	3.4	3.5	3.5	3.7	3.9
Q12 平均値	3.5	3.6	3.7	3.8	4.0
有効回答数	26,862	24,295	13,662	6,386	326

【入試形態との関連】

2010年度より、入試形態と学生の授業への取り組み（出席状況、予習・復習時間など）との関連を把握するために入学試験タイプのマーク欄を追加した。なお、回答は任意とした。（表3 入試形態別の項目平均値）

表3 入試形態別の項目別平均値

	一般入試	大学入試センター 試験利用入試	一般推薦入試	スポーツ推薦入試	指定校入試	附属校推薦入試	留学生特別入試	帰国生特別入試	編入学試験	その他	回答しない
Q1 平均値	4.7	4.6	4.7	4.5	4.8	4.7	4.8	4.5	4.6	4.8	4.8
Q2 平均値	3.7	3.7	3.8	3.9	3.8	3.8	4.1	3.8	3.8	4.1	3.7
Q3 平均値	1.3	1.3	1.4	1.7	1.4	1.5	1.9	1.7	1.5	1.5	1.5
Q4 平均値	3.2	3.1	3.2	3.0	3.2	3.1	3.5	3.3	3.2	3.5	3.1
Q5「はい」 回答率	94.4	94.6	95.6	94.7	95.7	95.6	96.6	89.5	89.9	93.6	94.1
Q5「いいえ」 回答率	5.6	5.4	4.4	5.3	4.3	4.4	3.4	10.5	10.1	6.4	5.9
Q6「はい」 回答率	97.2	97.2	97.3	97.4	98.0	97.1	97.3	95.9	95.8	96.8	97.1
Q6「いいえ」 回答率	2.8	2.8	2.7	2.6	2.0	2.9	2.7	4.1	4.2	3.2	2.9
Q7 平均値	3.2	3.1	3.2	3.4	3.3	3.3	3.2	3.3	3.2	3.1	3.3
Q8 平均値	3.7	3.7	3.7	3.8	3.8	3.7	3.9	3.5	3.7	3.9	3.6
Q9 平均値	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.1	3.9	4.1	4.3	3.8
Q10 平均値	3.7	3.7	3.6	3.7	3.6	3.6	3.8	3.6	3.7	3.9	3.4
Q11 平均値	3.5	3.5	3.4	3.4	3.5	3.4	3.8	3.5	3.6	3.8	3.3
Q12 平均値	3.7	3.7	3.6	3.6	3.7	3.6	3.8	3.7	3.8	3.9	3.5
有効回答率 (%)	54.3	8.4	11.2	2.7	4.1	7.4	1.3	0.4	0.9	0.7	8.6

表4-1 学科・専攻別の項目別平均値（仏教学部禅学科～文学部歴史学科考古学専攻）

(学部) (専攻) (学科)	(仏教) (禅)	(仏教) (仏教)	(文) (国文)	(文) (英米文)	(文) (地域文化研究) (地理)	(文) (地域環境研究) (地理)	(文) (歴史) (日本史学)	(文) (歴史) (外国史学)	(文) (歴史) (考古学)
Q1 平均値	4.5	4.6	4.7	4.7	4.7	4.7	4.8	4.7	4.7
Q2 平均値	3.6	3.7	3.7	3.8	3.8	3.7	3.7	3.8	3.7
Q3 平均値	1.5	1.4	1.3	1.4	1.3	1.4	1.2	1.3	1.3
Q4 平均値	2.8	2.9	3.2	3.0	3.4	3.3	3.2	3.3	3.2
Q5「はい」回答率	93.8	94.0	96.7	92.8	96.5	95.2	93.0	94.0	93.9
Q5「いいえ」回答率	6.2	6.0	3.3	7.2	3.5	4.8	7.0	6.0	6.1
Q6「はい」回答率	96.4	95.6	99.0	97.6	96.9	97.0	96.8	95.7	95.9
Q6「いいえ」回答率	3.6	4.4	1.0	2.4	3.1	3.0	3.2	4.3	4.1
Q7 平均値	3.2	3.2	3.2	3.1	3.2	3.2	3.1	3.1	3.1
Q8 平均値	3.7	3.7	3.8	3.8	3.8	3.7	3.8	3.9	3.7
Q9 平均値	4.0	4.0	4.1	4.0	4.1	4.0	4.0	4.0	4.0
Q10 平均値	3.6	3.6	3.6	3.6	3.7	3.6	3.6	3.8	3.6
Q11 平均値	3.5	3.4	3.5	3.5	3.5	3.4	3.5	3.6	3.5
Q12 平均値	3.6	3.6	3.7	3.7	3.8	3.6	3.7	3.8	3.6
有効回答数	1,537	2,618	3,963	3,834	1,446	1,368	2,886	2,010	1,125

表4-2 学科・専攻別の項目別平均値（文学部社会学科社会学専攻～経済学部現代応用経済学科）

(学部) (専攻) (学科)	(文) (社会)	(文) (社会)	(文) (心理)	(経済) (A)	(経済) (B)	(経済) (商)	(現代 応用 経済) (経済)
Q1 平均値	4.8	4.7	4.8	4.6	4.6	4.7	4.6
Q2 平均値	3.7	3.8	3.7	3.7	3.9	3.8	3.8
Q3 平均値	1.3	1.3	1.2	1.4	1.6	1.5	1.5
Q4 平均値	3.1	3.2	3.2	3.2	3.4	3.4	3.1
Q5「はい」回答率	94.9	95.1	92.8	94.8	93.4	95.5	95.6
Q5「いいえ」回答率	5.1	4.9	7.2	5.2	6.6	4.5	4.4
Q6「はい」回答率	98.5	96.4	97.6	97.1	98.5	97.6	96.9
Q7 平均値	1.5	3.6	2.4	2.9	1.5	2.4	3.1
Q8 平均値	3.2	3.2	3.2	3.2	3.1	3.2	3.3
Q9 平均値	3.7	3.7	3.7	3.6	3.6	3.6	3.6
Q10 平均値	4.0	4.0	4.0	3.8	4.0	3.9	3.9
Q11 平均値	3.5	3.7	3.6	3.5	3.7	3.6	3.6
Q12 平均値	3.4	3.5	3.5	3.4	3.7	3.4	3.5
有効回答数	1,364	1,784	2,072	7,295	139	4,489	2,417

表4-3 学科・専攻別の項目別平均値（法学部法律学科フレックスA～グローバル・メディア・スタディーズ学部）

(学部) (専攻) (学科)	(法) (法律A)	(法) (法律B)	(法) (政治)	(経営) (A)	(経営) (B)	(市場戦略) (経営)	(診療放射線技術科) (医療健康科)	(グローバル・メディア) (グローバル・メディア・スタディーズ)
Q1 平均値	4.6	4.6	4.6	4.6	4.3	4.6	4.8	4.7
Q2 平均値	3.6	3.7	3.7	3.7	3.8	3.7	3.8	4.0
Q3 平均値	1.4	1.5	1.4	1.4	1.5	1.4	1.6	1.6
Q4 平均値	3.2	3.2	3.3	3.1	3.2	3.0	2.2	3.3
Q5「はい」回答率	94.3	94.2	95.4	93.8	92.2	93.6	96.0	96.1
Q5「いいえ」回答率	5.7	5.8	4.6	6.2	7.8	6.4	4.0	3.9
Q6「はい」回答率	98.0	97.1	96.7	97.0	98.2	97.8	97.0	97.9
Q6「いいえ」回答率	2.0	2.9	3.3	3.0	1.8	2.2	3.0	2.1
Q7 平均値	3.2	3.2	3.2	3.2	3.2	3.2	3.3	3.3
Q8 平均値	3.6	3.7	3.7	3.6	3.8	3.7	3.6	3.8
Q9 平均値	3.9	3.9	4.0	3.9	4.1	3.9	3.8	4.1
Q10 平均値	3.5	3.7	3.6	3.6	3.9	3.6	3.5	3.8
Q11 平均値	3.4	3.5	3.5	3.4	3.6	3.5	3.4	3.7
Q12 平均値	3.5	3.6	3.6	3.6	3.8	3.6	3.5	3.8
有効回答数	7,046	2,578	4,950	5,958	171	3,163	2,284	5,664

集計結果について

平成23年度の後期授業アンケートは、前期に実施されたものと同じ構成・内容である。Q1～Q3が学生の自己評価、Q4～Q12が学生による授業に対する評価、Q13～Q15が担当教員による個別質問、Q16～Q18が自由記述となっている。

まず、表1の記名の有無に関して、前期では無記名率が83.9%だったのに対し、後期では6.2%上がり90.1%となっている。記名の選択方式は平成22年度から採用されたものだが、今年度のような形で無記名率が高くなっていく傾向が見られるのであれば、授業アンケートの形式について検討する余地が出てくる。

また、表2の学年別の平均値に関して、前期と後期のアンケート結果を比較すると、Q1、Q2はすべての学年でポイント数(0.1～0.4)が若干下がっている。ただし後期のアンケート結果でも、Q1、Q5、Q6、Q9の平均値は学年を問わず高い値を示しており、それは表4の学部・専攻別の平均値においても見てとれる。それゆえ、前期と後期のポイント数の変化をもって、通年科目よりも半期科目の方が学生の熱心度や満足度が高いと結論づけることは性急であろう。しかし、Q2、Q10、Q11に関して、1年生のポイント数がそれぞれ0.4低くなっており、このような傾向は、表3の入試形態別の分析結果においてもあらわれている。表2、表3における1年生の前期と後期のアンケート結果の変化、および表4における全体の傾向としてのポイント数の微減は、今後の初年次教育科目導入に向け、意識しておくべきものと思われる。

連載企画：よりよい教育のために

フィールドワークで出会った駒大OB：初年次教育に思う

グローバル・メディア・スタディーズ学部・教授 白水 繁彦

1. ある町での出会い：A氏のこと

初年次教育に関してなにか書くようにとのご懇諭をいただきました。初年次、すなわち大学に入ってすぐというのは、発達心理学的には青年期の多感な時期で、自我形成のもっともだいじな時期でもあります。人生のそのような微妙な段階の青年に少なからぬ影響を与えなければならない。つまり、初年次教育というのはじつに厄介な仕事であります。ほんとうは個人の問題だからわれわれが傍^{はた}から口出しをすべきではない。そういう声が私にも聞こえてきますし、そうだよなあと思う自分もいます。この文章を書くようにとのお誘いを受けた時、私にその資格があるだろうかと自問しました。その時、ここのところずっと心の隅に引っ掛かっているある町での出来事を思い出しました。そして、あ、あのことと絡めて書けばなんとかなるかもしれないと思ったのです。こうして、つい「快く」お引き受けすることになってしまったというわけですから相変わらずの粗忽者です。

ともあれ、その町での出来事から始めましょう。私は大学教師になって30年余り、ゼミなどの学生を連れて泊まりがけでフィールドワークに出かけるのを常としてきました。フィールドワークの経験なしでは社会学を学んだことにならない、というのが恩師の口癖だったということもありますが、なにより、合宿フィールドワークに連れて行った後はゼミがやりやすい。学生のなかにリーダーシップを発揮するものが出てきたり、俄然研究に目覚めるものが出てくる。大学院進学者まで出てくることある。その最たる例は、フィールドワークに目覚め、日本の大学院でとてもいいモノグラフを書き、いまアメリカ中西部の超名門大学の博士課程に奨学金付きで在籍するまでになった学生でしょう。そこまで行かなくても、それまでなんとなくよそよそしかった学生が合宿フィールドワークの後は親しく話しかけてくるようになる。このような効用を感じ取ってきた私は、駒澤大学に赴任してからも学生をフィールドワークに連れていくことにしたのです。

ある町で例によって何日か泊まりこみでの調査（住民への

インタビューが主たる内容)をし、最終日いよいよ打ち上げの夕餉が始まりました。お世話になった住民のリーダーのかたがたをまじえての交歓会となるのがわがゼミの通例ですが、その日も地域の活動家の面々をおよびしました。なかに、近くに別荘をお持ちの知人A氏もまじっています。彼とは数年前からの付き合いです。彼は国際的に活躍するいわゆるエリート。英・独・仏の言語を操ります。彼がその別荘をフィールドワークの中継地点として学生に開放し、さらに道に迷った学生を自慢のステーションワゴンで拾ってくれたりしたのです。ずいぶん親切な人だなあと感心していたのですが、そのわけは後にわかります。さて、学生のスライドを交えての成果発表も終わり、宴が始まります。学生も町の人たちとすっかり打ち解け、だんだんお酒もまわってきました。いつのまにか私のすぐそばに来ていたA氏がふと洩らされた。「じつはぼくも駒澤の出身なのです」。私はびっくりして、「あなたのような先輩がいると知ったら、学生はどれだけ勇気づけられるか。なぜ今まで言ってくれなかったのですか」

私の問いに、A氏は高校時代のことから話し始め、大学入試の失敗のことにまでおよびました。そして、駒澤に入った経緯にもふれ、こういったのです。「正直、ぼくは彼ら（私のゼミ生）が羨ましい。先生といっしょに勉強に来て、みんな生き生きしている。そして仲間と助け合ってインタビューをしている姿を見ると、自分の学生時代はなんだったんだと悲しくなる。ぼくのいった学部先生はみんな、この人なんのために教師をやっているんだろう、と思ってしまうような人ばかりだった。田舎から出てきて、ちょっと大学に期待しすぎていたからかもしれないけれど、ほんとうにがっかりした。同級生でもやる気のあるやつほど落胆していた。親しい友だちができる間もなくぼくは学校へ行かなくなり、アルバイトに精を出すようになった。そして貯めたわずかのお金を持っては外国に出かけた。ドイツ、イギリス、フランス、イタリア・・・毎年貧乏旅行を続けた。旅のなかで貴重な友人を得たし、現地での（法律すれすれの）アルバイトを通して言葉を身に付けた・・・。だからぼくにとっての駒澤は口に出していうほどの存在ではないのです」

お酒が入っているからとはいえ、なんと率直な物言いでしょう。大学教師の端くれとして頭をガンと殴られたほどの衝撃を受けました。自分もそのような教師としてみられているのではないか。それから2年間、A氏の告白は頭から離れたことはありません。ずっと心の片隅で疼いている、そんな感

じです。そして、A氏のことを思うたびに自分の新入生のころを思い出します。私はA氏同様、高校はいわゆる地域の進学校に入りました。全国でも何番目かに古いという旧制中学が前身だと教師が自慢していたのを憶えています。そんな学校に入ったのはいいのですが、映画にあけくれ、闇雲に映画評を書き、小説を濫読し、書や焼き物に凝るといふ、今思うと「なんともはや・・・」という高校生です。当然成績は凸凹。これまたA氏同様、希望の大学に入れずに、私の場合3月の「落穂拾い」といわれる制度に救われた（掬われた）。したがって全く気乗りのしないまま新学期がスタートしたわけですが、それでもなんとか大学に通い、次第に自らすすんで勉強らしい勉強をするようになったのはどういうわけか。ひとえにサークルの仲間とフレンドリーな教授陣のおかげだと今にして思います。かれらの存在がなかったら、A氏のようなバイタリティも知能も持ち合わせていない私はどのような人生を歩むことになったか・・・・。私にとっての仲間と教師のありがたさを改めて強く思わせてくれたのがA氏であるというわけです。

さて、この町でのエピソード、これで終わりません。次の年に学生といっしょにインタビューした相手、B氏がまたびっくりさせてくれたのです。

2. B氏のこと

B氏はその町では町おこしの主役の一人としてつとに有名で、各種イベントを企画しては大勢の人を集めて成功をおさめています。イベントの折りはチンドン屋を組織しては自ら各種楽器を奏でて町を練り歩き、その器用さと押し出しの良さで町じゅうで知らない人はいないという人気者です。彼に、その動機、志向などを聞こうと次の年もその町に学生と出かけました。インタビューしてわかったことは、そのビジョンの確かさ、周到な計画性、自ら骨身を削る潔さなどなど、学生を感動させずにはおかない内容でした。

私を驚かせたのはそれにもまして、彼がまた駒澤の卒業生だと打ち明けたことでした。彼も自分が駒澤の出身だとはあまりいっていない由。A氏も駒澤ですよ、と私がいったら、えっ、そうなの、と驚いていましたから、お互い知らなかったようです。B氏は学部は違いますがA氏よりかなり先輩で、在学中に中畑や石毛が活躍していて神宮には何回か足を運んだといいます。B氏もA氏同様いわゆる名門高校の出身で、親しい先輩や級友の多くが有名大学へ進学したせいもあり、「昔は駒澤はとても入りやすい学校で、あまり口に出してい

いたくなかった。しかし、神宮でどんどん勝ち進んでいるのをみれば、そりゃ、ずいぶん気分がよかった。いまでも駅伝なんかを見るときは力が入るよね」。B氏もA氏同様、学業には身が入らなかったという。「それは自分の学力が低かったせいもあるけど、ぼくがついた先生がどこか有名大学の退官教授で、ぼくらが理解しているかどうかなんかまるで意に介していないという感じなのよね。そんなわけで、勉強にはあまり関心が持てなかったけど、学校には行った。というのは、学食で食事をするためとサークル（音楽関係）の仲間に出るために。砧の部室で結構練習したなあ。それに東京出身のサークルの仲間がアルバイトを紹介してくれた。これは助かった。稼いだ金で買った安い酒を友人の下宿で呑んだ。ほとんど毎日のように誰かの家で呑んでたね」

「じゃあ、けっこう楽しい学生生活だったわけだ」と私がつつこむと、「そりゃ学生生活は楽しいさ。いまとは違って就職活動は夏休み明けからだったから、それまで精いっぱい稼いで精いっぱい遊んだという感じだね」

「その割にはけっこういい会社に入ったじゃない」

私は彼が故郷のその町に帰って家業を継ぐ前は大手のビール会社で働いていたという話をだれかに聞いたことがあります。

「うん、学力が低く就職活動は大変だった。高校の先輩はもちろん、サークルやアルバイトで知り合った人の知り合いの知り合いをたどって会いに行く。もうどんなコネでも徹底して探す。探すというより、作る、という感じだね。ビール会社は、そうしてたどり着いた人がその会社の重役だった。その人が（一橋大学同窓会の）如水会館に来いというので会いに行ったのを憶えているよ。入れてくれたのはいいけど同期が東大だとか一橋だとか早慶だとかで、ぼくや近大出身のやつなんかは恥ずかしくて学校の名前なんかいえなかったよね」

B氏もA氏同様、バイタリティに溢れた人であります。B氏も駒澤出身を公言していないが、さほどネガティブな評価をしているわけではない。これはサークルを通して得難い友人をたくさん得たからという部分もあるでしょうし、「少なくとも神宮ではいい気持ちになれた」という快感体験も寄与するところがあるでしょう。サークルの仲間が学校と自分を繋いでくれた、というのは私の場合も同様で、とても納得のいく話です。私にはスポーツでの快感体験はありませんが、先生たちがお昼や夕飯をご馳走してくれて、貧乏学生だった

私はその分食費が浮いて大いに助かったという経験があります。ご馳走してくれる教授の中にはTVなどでも有名な人がいました。他大学に行った級友などに「よく〇〇教授におごってもらっているよ」と話すと羨ましがられました。これなど今思えばささやかな快感体験だったのかもしれない。

3. 1年生の基礎ゼミのこと

私は前に勤めた大学で1年生の基礎ゼミを担当しました。基礎ゼミは、その前半（いまでいう前期）で、学校に馴染ませよう、学部内に親しい友人をつくってもらおう、教師との距離を狭めよう、というような意図があり、後半（後期）で、専門に入る準備をさせようという意図があって始められたものです。もちろん、私もそうした目的は理解していたし、そのような目的を全うしようと試みてはいましたが、しょせん、制度としての基礎ゼミに過ぎなかった。合宿も懲罰されたからやる、というような感じでした。つまり、その大学では、基礎ゼミは学生にも教師にも「自明のこと」としてあった。だから、それがなかったり、それなりの機能を果たしていないとどんなことになるか、深く考えたこともなかったのです。しかし、A氏、B氏そして私の3人の体験に照らすと、この基礎ゼミ、けっこう大事な制度だったのかもしれない。A氏、B氏にとっては、相談できる教師にめぐり合うチャンスになったかもしれない。私は仲間にも教師にも恵まれたけれど、それはたまたま運がよかっただけかもしれません。そう考えると基礎ゼミ担当の私は、とくに前半はもう少し心して学生に接しなければならなかったといまさらながら思うのです。

FD研修会の開催のお知らせ

駒澤大学FD推進委員会では、授業改善や教育の質を高めることを目的として、さまざまなFD活動を行っております。その一環として、「平成24年度自己点検・評価に向けて」をテーマにしたFD研修会を下記のとおり開催いたします。

- 日時 平成24年3月15日（木）
14:00～15:30
- 場所 2研-209教場
- テーマ 平成23年度FD研修会
『平成24年度自己点検・評価に向けて』

4. 次 第 ・ パネラーの先生方による講演

- ① 経営学部 猿山 義広先生
(FD推進委員会委員、学部等自己点検・評価運営委員会委員)
「自己点検・評価におけるFD活動の取り組み」
- ② 仏教学部 吉津 宜英先生
(附属研究所自己点検・評価運営委員会副委員長)
「内部質保証の問題点ーアウトカムアセスメントをめぐってー」

編集後記

『FD NEWSLETTER』第30号をお届けします。

本号では、平成26年のカリキュラム改革で全学に導入される「初年次教育」をテーマに企画・編集を行いました。巻頭言では全学共通科目教育運営委員会委員長の齊藤正先生に「初年次教育科目の導入に向けて」をご執筆いただき、連載企画にはGMS学部の白水繁彦先生に「フィールドワークで出会った駒大OB：初年次教育に思う」をご執筆いただきました。平成26年度のカリキュラム改革に向けて大学教育は大きな転換期を迎えようとしています。「自ら学び、実行する。様々な経験をしながら、知識を身につけ成長していく。」諸先生から寄せられた原稿を拝読しながら、改めて「今大学に求められているものは何か？」について深く考えさせられました。

また、「2011年度学生による授業アンケート（後期）」の集計結果と分析結果も報告しています。今回のアンケートの結果を踏まえ、学生の率直な意見をどのような形で授業に取り入れていくのか、また記名の有無の必要性など今後の検討課題は多いようです。

最後に、年度末のご多忙の中、貴重な原稿をお寄せいただいた齊藤先生、白水先生に深く感謝申し上げます。

(内藤寿子・末次美樹)

【タイトル横の写真は、駒沢キャンパス】

FD NEWSLETTER Mar. 2012 第30号

発行日：2012年3月15日

発行者：駒澤大学FD推進委員会

〒154-8525 東京都世田谷区駒沢1-23-1

TEL 03-3418-9444 Fax 03-3418-9114

(事務局：教務部)